



荒木 経惟
Araki Nobuyoshi



百瀬 俊哉
Momose Toshiya



泥谷 誠一郎
Hijiri Seiichiro



近藤 聡
Kondo Satoshi



久保田 亜矢
Kubota Aya



奥山 淳志
Okuyama Atsushi



早田 清美
Hayata Kiyomi

荒木 経惟
東京 66

撮影前、浅草ビューホテルのラウンジで打ち合わせをしていると、玄関前に入だかり。見れば文金高島田と羽織袴の晴れ姿。「よし、いくぞ」。カメラを携え、猛然と走りだす。結婚を祝福する人ごみに交じってシャッターを切る。切る、切る、切る。「あ、アラキーだ。ざわめく人々。新郎新婦に声をかけつつまた切る。それで上がったのが表紙の写真。どうです、幸せそうでしょう。」

「今日はね、東京の幸せを撮るんだよ。幸せいっぱいの写真ね」

そうしてこの日の撮影がスタートした。歩道橋を渡り、六区のポルノ映画館を眺め、花やしきを抜ける。浅草寺では天井画を眺め、行きつけの人形焼き屋をひやかす。どこへ行っても「荒木さん」「荒木さん」と声がかかる。撮られる人も荒木さんとわかるとニコニコ。荒木さんに会うと、なぜだか幸せになってしまう不思議。ところでタイトル。65で撮っているのに「東京66」とは、これいかに。実は荒木さん、この5月に66歳の誕生日を迎える。

「66歳だよ、おめでたいねえ」
5月25日からは東京・清澄白河

のタカ・イシイギャラリーで個展「色淫女」。秋には江戸東京博物館での大掛かりな個展「東京人生」と同名の写真集が発売される。大忙しの荒木さんなのであった。

ポプ・ハンリケ

マリリン・モンロー―私も、80歳―

水越 武

赤道の氷河―ルウエンゾリ

▼28頁参照

百瀬 俊哉

NEVERLAND マイ・ハバナ

世界の都市を本格的に撮り始めて15年。ニューヨーク、東京、上海、イスタンブール、ブエノスアイレス。「からっぽの風景」をテーマにしてきた。言い換えれば、「無人」とはいえ、文字通り何も無いわけではない。たとえ視覚化されなくても、感じ取ることのできるものが都市の根底にはある。作品に表出するその気配が大切だと繰り返し表明してきた。

だがハバナでは、あえて人物の入った写真を撮り、セレクトした。きっかけはブエノスアイレスの

夜。現像所から歩いてホテルに戻る途中で暴漢に襲われ、それ以上撮影できないまま帰国した。再び

カメラを持つて撮影するためのリハビリに1年。「写真家の本能のようなもの」がうずき、ハバナに降り立つと――。

「無意識のうちに、以前よりさらにゆっくり、会話をしながら撮るようになっていました」

人物入りの写真をセレクトしたのは意識的だ。人の気配をより視覚化したいと思うようになったのだという。

「私が求めるのは、変化や進化ではなく『深化』。その表れだと思えます」

◆ももせ・としや 1968年東京生まれ。九州産業大学大学院芸術研究科修了。2000年に日本写真協会新人賞。02年に土門拳賞。

有元 伸也

aripho 2006

▼218頁参照

元田 敬三

second flash

▼218頁参照

Portfolio

泥谷 誠一郎

門司の町並み

泥谷さんは高校卒業後、旧門司

市役所建築部に入った。一級建築士の資格を持ち、都市開発など建築行政の仕事に携わってきた。

1980年ごろ体調を崩し、健康のために、北九州市内を歩いて風景や市民の写真を撮り始めた。海と坂の町・門司には、歴史的建造物、変化に富んだウォーターフロント、海岸線の荷物専用引き込み線、ごく普通の民家や町並みなど、魅力的な被写体がたくさんあった。

83年から2005年に撮影したこの作品は、独立した二人の子供の部屋を利用して開設した「フォトギャラリーなつみ」小倉南区

（093-196217492）で見ることがができる。ほかにも92年に廃止された西鉄路面電車や組写真など、すべてモノクロ・大四切で20点を展示している。

◆ひじや・せいいちろう 1935年大分市生まれ。写真集「北九州市 門司の町並み」刊行。

近藤 聡
12歳の肖像

ここに登場するのは、1992年に教えた子だった小学6年生。ちよどりともから大人へと感情が激しく移り変わる時期に、子どもたちが見せてくれた活動の日々。それは意外なほど穏やかで温かく、